



◆遊びとは(小川,1990)

1. 遊びは何かを獲得するために行うものではなく、遊びそのものを楽しむために行うもの
2. 遊びは子どもが自発的にはじめられるもので、主体的に進められ、展開されるもの
3. 外的に認められたりほめられたりすることで動機が高まるものではなく、自分が楽しいからやるもの
4. 「おもしろい」「次はどうなるのだろう」という思いが次の行動の目あてを生む
 =子どもの内からの欲求によって行動が起きる状態、つまり自己課題をもって遊びに取り組む状態のとき、子どもは「主体的」に行動する。

◆ 保育と遊び

1. 情緒の安定(安心感・安定感・居場所感)があつてこそ、遊び(没頭や挑戦)が生まれる。
 安心して過ごすことができる保育者・空間・時間が確保されていること
2. 遊び = 「動いていること」ではなく、「明るく・楽しく・元気」とは限らない
 子どもの表情や目線・身体や手先の動きの中に、心の動き・経験をよみとることができる
3. 子どもと保育環境(ひと・モノ・こと)との関わりの中で、子どもの心が動くところに「遊び」が生じている
 子どもの発達過程、内面の読み取りを踏まえ、子どもの心が動く環境を準備することで、子どもの充実した遊びが生まれていく

4. 発見や思いを共有したり、一緒に試行錯誤できる人(保育者・仲間)の存在が、遊びをさらに広げたり深めたりしてゆく
5. ときには一人でじっくり・ゆったりと、対象にかかわることが、対象や自分との対話となり、経験が深まっていく
6. 自由遊びも設定活動も、子どもの主体性に遊びの鍵がある
 「自由遊び」も、子どもの主体性が尊重されず、禁止事項や制限が多くなれば、「遊び」ではなくなってしまう。一方、「設定活動」も自ら取り組む意欲が引き出され、主体性が尊重されていけば「遊び」となる
7. 保育者の意図と子どもの主体性のバランスが、園における子どもの育ちにつながっていく
 子どもに必要な経験の見通し(教育課程・保育課程 / 指導計画)と、子どもも理解(発達過程・これまでの経験・興味関心)を踏まえ構成した環境に、子どもが自発的・主体的にかかわった結果、子どもの育ちが生じる

8. 遊べない子どもの背景には必ず理由がある。
 - 保育者にとって課題となる子どもは、保育者が感じている葛藤と同じかそれ以上に、心の中に葛藤を抱えている可能性がある
 - 保育者が感じている問題を、「子どもの問題」としてではなく、「保育者自身の問い」として捉えてみる
 - 「問題を解決する」という視点ではなく、その子どもが感じていることや見ているものを観てみるなかで、見えてくることもある

- ❖ 発達課題に環境が合っていない(簡単すぎる・難しすぎる)
- ❖ やりたいことを見つけられる環境がない(選択できない)
- ❖ やりたいことを実現できるスキルが育っていない
- ❖ 子どもの思いやよさが、うまく周囲に伝わっていない・十分に受け止められていない

遊びにおける学び

◆ 乳幼児期における学び (秋田,2000)

子どもが自発的に様々な人や物、出来事と直接出会い、主体的に関わった結果生まれてくる

数人の子どもが同じ遊びや生活をしていても、感じることや気づくものは一人ひとり異なる。

友達、物的環境、時間、気分などが異なれば、同じ活動でも異なった感じ方や気づきが引き出される

◆ 遊びの中の学び (無藤,2013)

「遊びの中の学び」という言葉の「学び」とは、小学校以降の学習だけを指すのではなく、広い意味での子どもの成長を指す

「教科」ではなく「五領域」を視点とした総合的な指導

◆ 乳幼児期の子どもの学びの特徴 (ヴィゴツキー)

生活的概念
子どもが様々な事物に直接関わることによって学びが繰り返されることにより、子どものなかで論理的な関係を定義することで生じる個人的・感覚的な概念

科学的概念
学校教育のなかで言語化して教育される一般的・抽象的な概念

↓ 小学校4年ごろ

具体的な体験を通して物事を理解しようとする経験を繰り返しながら、具体的に触れたり操作したりすることができない抽象的な物事の仕組みへと興味を持つようになっていく

乳幼児期には、自分の心身の感覚を通じた多様な経験が大切であり、その経験が学びにつながっていく

◆ 遊びの中の学びと保育 (無藤,2013に加筆)

「遊びの中の学び」の捉え方と保育

遊びの中で充実した経験をすると、結果的に成長が起きる

遊びを充実させること+育ちを捉えることが必要

遊びが充実したところには、必ず学びの芽生えがある

遊びを充実させること+育ちと学びの芽を保育者が捉え、伸ばしていくことが必要

小学校の学習の先取りとしての学びを得るための遊び

小学校の学習の土台としての学びや学びに向かう力を、遊びを通してつける

↓

21世紀に必要な力(知識の活用・思考と創造・対人関係)

1. 身体を使う
 - 自分の身体で感じること(=身体をくぐる)が、認知・想像・思考・言葉の基礎となる
 - 身体感覚の育ちは、「自己」の育ちともつながっている
2. 試したり、考えたりする
 - 様々な事象への興味関心から、探求へ
 - 繰り返しや試行錯誤のなかに、科学的思考の芽がある
 - 子ども一人ひとりのモノとの対話(かかわり)、内的な自分との対話 = 一人ひとりの充実した経験
 - 発見の喜びや試行錯誤は、仲間とのつながりを生む
3. 想像する
 - 自分のなかの経験の積み重ねが想像する力になってゆく
 - 話を聴いて想像することや、自分の気持ちを伝えることで、言葉の力がついていく

4. 仲間とともに

- 一人ひとりの経験があつての集団の経験 → 協働的な学び
- 体験を共有する経験、共振、日々の生活の積み重ね
- 葛藤、自己発揮・抑制の経験・共感性の育ち
- 言葉の育ち(乳児期からの身体のリズム、他者との同調、言葉の響き、受容の経験)

遊びの終わり-片付け-

4歳児6月のある日、戸外での遊びから片付けへの保育場面です。

10人くらいの幼児が、それぞれスコップやシャベル、カップやお皿などを使って砂遊びをしています。片付けの時間が近づいてきたので、先生が「片付けようね」と声をかけました。

B児は、自分の使っていた遊具についた砂を丁寧に手で落とし片付けていますが、数が多く作業がゆっくりであるため、全て片付けが終わるまでにはまだかなり時間がかかりそうで、次の活動の時間に間に合いそうにありません。

あなたはどうしますか？

(箕輪,秋田,安見,増田,中坪,砂上,2015)

◆片付け=遊びに「片を付けること」

- 遊びが子どもにとって主体的に行うものであれば、「遊び」「遊びの場」「遊んだ物」に、その子自身が主体的に別れをつけるのが片付け
- 遊びに充実感があるから、片付けの必要感も育つ
- 年齢によって、片付けの中で育てたいことも変わる

- 3歳児: 遊びから気持ちを切り替えること
次の活動に期待をもつこと
- 4歳児: 時間的な見通しをもつこと(次の活動・明日)
仲間のことを意識すること
丁寧さ・美しさ・気持ち良さの感覚を育てること
- 5歳児: 生活の流れなど、集団生活を意識すること
遊びに見通しを持ち、状況による判断をすること
物の数や大きさ、形など(数量の感覚)に気づくこと

おわりに

- 保育者自身が子どもの遊びをおもしろがる、楽しむ
- 子どもの世界の豊かさを一番享受できるのが保育者
- 子どもの主体性の尊重と、保育者の援助(環境構成・モデリング・言葉掛け: 受容・共感・質問・提案)
- 子どもの遊びにおける経験・育ちを捉え、次の経験・育ちにつなげていく
- 子どもの遊びの豊かさと、遊びと発達の関連を、保護者にも伝えていく
- 子どもの様々な表情を伝える
- 小学校以降の学習や、生きていく力とのつながりを伝える
- 一生遊び続けられる子どもに